本殿彫刻

八坂神社はその本殿・拝殿に施された精緻な透かし彫りの彫刻などにより、取手市の指定文化財として登録されております。

その見事さは、ご覧になるために遠方よりはるばる参拝に来られる方が多数いらっしゃる程です。

透かし彫りは特に技術の必要とされる彫刻の方法であり、その見事な作品は実際に目の前でご覧になれば皆様もきっと驚かれることでしょう。**以下、胴羽目彫刻三点共、作者は後藤高之助桂林。桂林については２頁下で説明。**

天の岩戸

高天原で行った素盞嗚命（スサノオノミコト）の悪戯に怒った天照大神（アマテラスオオミカミ）が天の岩戸に隠れてしまい、高天原、常世の国（地上の世界）は真っ暗闇になってしまいます。

八百万（ヤオヨロズ）の神々は相談をして、何とか天照大神を岩戸の中から引っ張り出そうとします。

岩戸の前で天鈿女命（アメノウズメノミコト）が楽しそうに踊り、神々は常世の長鳴き鳥（にわとり）を鳴かせて、朝を模倣したり楽しく宴を開きました。

手力雄神（タジカラオノカミ）が岩戸の陰に隠れ、折をみて怪力で岩戸をこじ開けようとしています。

外の騒ぎは何事かと、天照大神が岩戸の中から外を覗き込んだ時、鏡を見せて、鏡に映った姿に天照大神は自分以外に光を放つ神が現れたのかと勘違いします。

手力雄神はすかさず岩戸をこじ開け、天照大神を外に引っ張り出すことに成功しました。

これにより高天原、常世共に光を取り戻すことができました。

この彫刻は、まさに天照大神が隠れた天の岩戸を手力雄神がこじ開けようとした場面が描かれています。

岩戸の前では天鈿女命が踊り、常世の長鳴き鶏が泣き声をあげています。

神功皇后（ジングウコウゴウ）

熊襲（クマソ）征伐のため筑紫に出向いた夫君、仲哀天皇（チュウアイテンノウ）は、香椎宮（カシイグウ）で急死してしまいました。すでに身ごもっていた神功皇后（ジングウコウゴウ）のお腹の子が、皇子であることを知っている神（住吉大神）は、神功皇后に対し「仲哀天皇がなしえなかったことを、その胎中の皇子がなす」と神託を下しました。神の御意のまにまに従う神功皇后は、妊娠中でありながら、武内宿称(タケノウチノスクネ)とともに朝鮮半島に出陣し、新羅を討ち、また百済・高句麗をも帰服させ、帰国後に宇美（ウミ）で応神天皇（オウジンテンノウ）をお産みになりました。

その後、大和に帰り、応神天皇が即位する西暦 270 年まで摂政を行い、百歳で亡くなりました。

これが「記・紀」に記されている神功皇后のあらましであります。

こうした神功皇后のあり方は、わが子を守り、助け、立派に育てていく日本女性の象徴とされております。

彫刻は、古代の海の精霊である、安曇磯良（アズミノイソラ）の神楽の場面。

イソラの出現の様子は『太平記』巻三十九に「阿度部の磯良」（アドベノイソラ）の名で語られています。

それによれば、神功皇后が新羅を攻めたとき諸神を招いたが、イソラだけは醜い容貌を恥じて応じなかったため、諸神が歌舞を奏して誘い出した。

やがて、海底の竜宮城から潮の干満の霊力を持つ秘宝(干珠,満珠)を借り請けて献上し、皇后は新羅を討つことに成功したという。

後藤高之助桂林、後藤縫之助長男、安政五年(1858)～昭和七年、職人として本所六軒堀の[後藤功祐]のもとに身を寄せたが、腕が良いため手放して貰えず十年の後の明治 20 年頃(1887)本所外手町で独立した。

作風が独特であるため一目で判別することはできるが、後藤功祐の下職時代は自分の作品に刻銘を刻むことが許されなかった。[柴又帝釈天]祖師堂(本堂建立明治二十一年)の向拝彫刻は高之助職人時代最後の作だが、下職であったがゆえ、親方である後藤功祐の門人によって向拝竜裏の刻銘を削除された跡がある。

日本武尊蝦夷征伐

日本武尊(ヤマトタケルノミコト)は、東国に蝦夷(えぞ)征伐にやってきたとき、敵にだまされ、森の中で火を放たれます。

日本武尊は、天照大神(アマテラスオオミカミ)から授かった「雨の叢雲剣」(あめのむらくものつるぎ　素戔嗚命（スサノオノミコト）が八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治した時に尻尾から出てきた霊剣で、天皇家三種の神器のひとつ)で、周囲の草を薙ぎはらい、伊勢の倭姫（ヤマトヒメ）から授けられた火打ち石ではらった草に火をつけると、それが向かい火となって、周りの火が鎮まり、日本武尊は難を逃れます。

彫刻は、天叢雲の剣で、周囲の草を薙ぎ払い、同じく倭姫から授けられた火打石で払った草に火をつけると、それが向かい火となって、周りの火が鎮まり、日本武尊は難を逃れたという場面です。

「例大祭」は八坂神社の祭典中、最大の行事であり、取手市内は勿論のこと近郷近在に見られぬ夏祭りです。祭りは８月１日～3 日に行われ、3 日の夜が一番賑やかです。

四代高石伊八朗信明の彫刻 ：

懸魚(げきょ)と欄干より下回り二段の羽目板、登り勾欄下羽目板や欄干下頭貫獅子などの彫刻を残している。伊八朗は八坂神社の仕事を終えると、加藤勘造氏に呼ばれ、柴又帝釈天の仕事に、後藤保之助や寺田松五郎らと共に出向きます。本名：高石仙蔵、文久二年(1899)～明治 41 年(1908)。

宮彫師東都後藤本流と嶋村流(波の伊八)は敵対していたのですが、八坂神社で一緒に仕事をしていて異例な事といえます。更に、後藤流派の加藤勘造に柴又帝釈天まで招かれて仕事をした事実をみると、四代目伊八朗は彫師として腕がよかったのではないかと思われます。

初代の武志(高石)伊八朗伸由(宝暦元年(1751)～文政七年(1824))は「波の伊八」(鴨川市行元寺)です。

後藤縫之助、文政八年(1825)三月十二日生　下総国猿島郡猫実村(現岩井市猫実 1685)

野口弥左衛門の次男十五才「天保十一年(1840)」のとき、笠間の宮大工後藤正忠の弟子となり、十年後の嘉永二年(1849)二十四才で独立し、後藤の姓を受けた。

明治十年(1877)に上野公園で始まった第一回内国勧業博覧会で、「木彫狛犬一対」を出品、花紋賞牌を受賞、縫「殿」之助の称号を大久保利通より受ける。

以後刻銘は総て「花紋賞牌拝受　後藤縫殿之助」　(【注意】後藤縫殿助なる人物とは別人)

文政八年(1825)生、嘉永二年(1849)独立、明治三十四年(1901)没　行年七十六歳

受賞作品の狛犬一対

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会　資料